東大のひと①

酒井 邦嘉

Sakai Kuniyoshi

大学で学ぶということ

大学に入ってまずやること、サークル選び、新歓コンパ。それも確かに楽しいが、やはり大切なのは勉強。そこで、文系・理系を問わず駒場生の間で人気の高い、酒井邦嘉・助教授に大学の授業との付き合い方を聞いた。

□

——まず、先生の研究分野と総合科目・「認知神経科学」の授業内容について教えてください。

脳を通して心というものを探るのが、大きな研究のテーマです。私自身、かなり言語の問題に関心が集中しています。その中でも聴覚・視覚によって取り込まれた情報が、どうやって言語の情報として認識され、実際に言葉を話したり書いたりできるのかを研究しています。授業ではもっとグローバルに、認知神経科学とはどんなものか、さらに、心に対して今の科学はどれほどチャレンジできるようになったのかについて説明しています。

——私たちの多くは、専門的な知識がほとんどゼロの状態から授業を受けることになるのですが、そのような学生に対し、先生はどのように授業を進めていらっしゃいますか?

まず、知覚の中でも学生自身が現象を理解し、疑問を持ちやすい視覚を中心に授業を進めています。学生に様々な映像を見てもらい、「あれっ」と不思議に思ってもらった上で、知覚と脳のメカニズムについて考えてもらうようにしています。また、私は授業中に積極的に学生に質問をしますが、もっとアクティブに学生が反応してくれるといいなと思います。知覚の仕方や興味の持ち方というのは個人により違いがあって当然ですから。

——先生の授業には理系・文系両方の学生がたくさん出席していますが、何か反応の違いはありますか?

講義を終わって感想などを書いてもらうと、文系の学生のなかには、今の科学はこんなところにまで来ているのかと驚きを持つ人がいる反面、科学で心を説明することに抵抗を持っている人がいるのも事実です。一方理系の学生の場合、基本的にサイエンスというのは積み上げの学問ですから、どういうものを積み上げていけば、次に何が見えるのかという見方が習慣的に身についています。従って、そのようなアプローチでどこまで心に近づけるのかということに、関心が集中しているようです。

——高校の授業と、大学の授業の基本的な違いについて教えてください。

高校の授業というのは、テキストの知識を覚えることが中心だったと思います。しかし、認知神経科学の場合は特に、昨日までの考え方が今日には覆されるということがたくさんあります。したがって、型にはまった思考からどれくらい離れて考察できるかというセンスを試されるのが、大学の授業の特徴の一つだと思います。

——前期課程での総合科目の一コマの授業は、わずか半年間で完結してしまいます。その短い期間で、われわれは何を学ぶべきでしょうか?

講義というのは、一つ一つの細かい知識を記憶することだけが目的じゃないんですよね。講義を受けて何かひとつでも自分にとって心に引っかかる事が残れば、それはその人にとって非常にいいことだと思います。何かに対し疑問を持ち、深く考える姿勢が養われるのなら、講義というのはとても意味のあるものになるでしょう。

——大学生活を迎えるにあたり、心構えのようなものがあれば教えてください。

それでは三つのポイントを挙げたいと思います。

まず一つ目は、「ガイドブックを離れる」という事です。教科書や参考書を読むなと言うことではなく、そういう本からどういう意味でどれくらい離れられるのかということが重要になってきます。旅行でも、ガイドブックに書いていない寄り道をすることにより自分だけの面白さを発見する楽しみがあるのではないでしょうか。学問においてもガイドブックを離れ自分なりに考えることで、初めて「個」というものが自覚され、新しい発見も可能になるのです。

二つ目は、「新しいものに出会ったときに、驚きあるいは疑問を持つ」という事です。高校までは、テキストに載っている知識を信じないことには前に進めなかったと思います。しかし大学では、テキストや教官の説明をそのまま受け入れてしまうのではなく、その根拠を疑い、自分で納得するまでその理由を考える姿勢が求められます。理系であれ、文系であれ、学問上の革命とはいつもそこから生まれるからです。

三つ目は、「本物に触れる」という事です。学問にしろ趣味にしろ、本物（オリジナル）に触れることにより初めて得られるものがあるという事が、私の経験からも言えます。例えばアインシュタインに興味を持ったら、解説書にすぐ手を伸ばすのではなく、アインシュタインが自分自身の言葉で書き表したものを読んでほしいと思いますね。●

聞き手・浜辺麻由
Interview by Mayu Hamabe

撮　影・鳥谷亘
Photograph by Wataru Toritani

さかい　くによし
1964年生まれ。
東京大学大学院総合文化研究科助教授。
東京大学理学部卒。
マサチューセッツ工科大学訪問研究員等を経て
97年より現職。専門は認知脳科学。
主著に『記憶と学習』（共著：岩波書店）、
『心にいどむ認知脳科学』（岩波科学ライブラリー）
などがある。

東大マメ知識　駒場の果てにある一二郎池。一人で見ると留年するという言い伝え。